

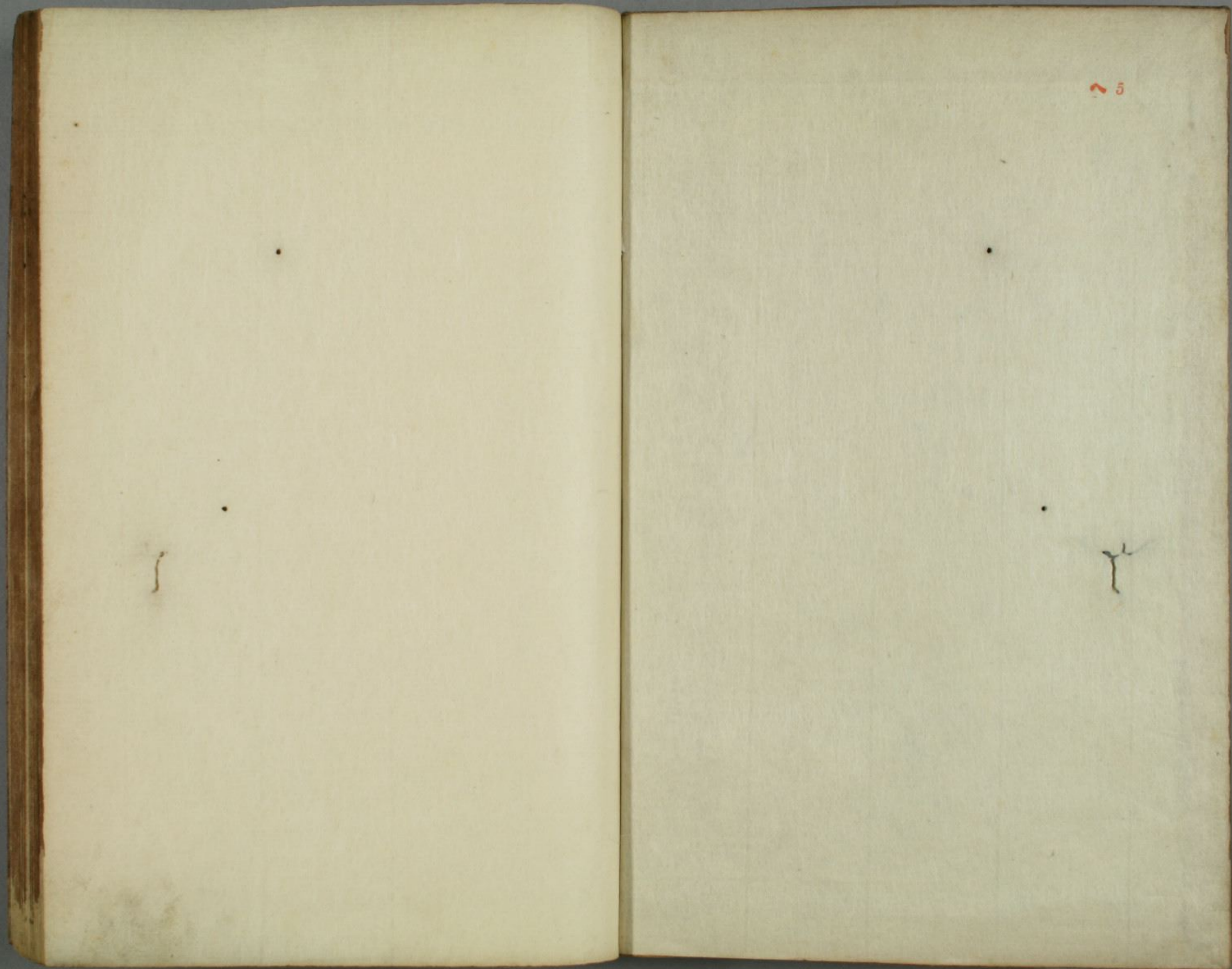


祝業大全

秋之部
冬之部

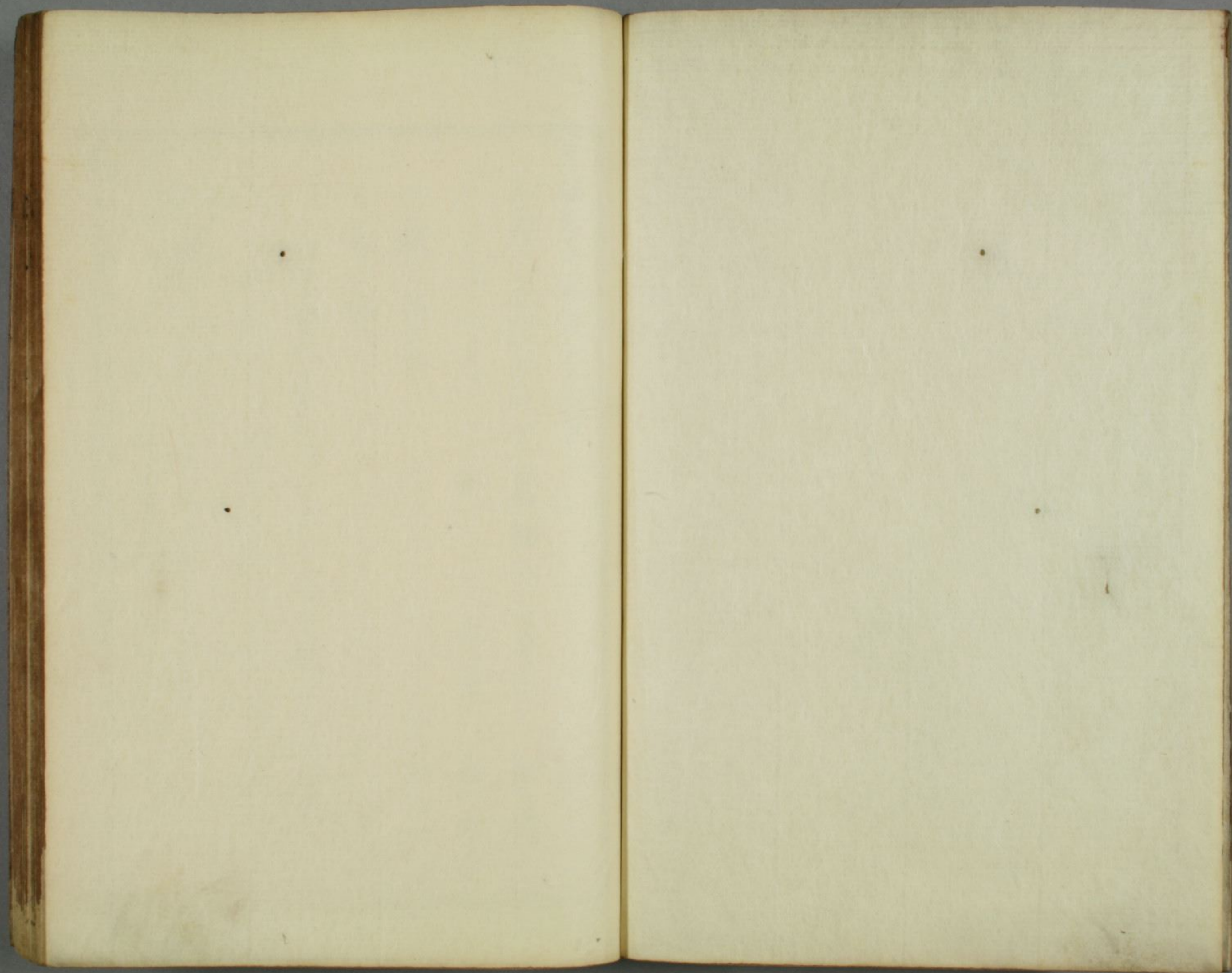
利
1061
5

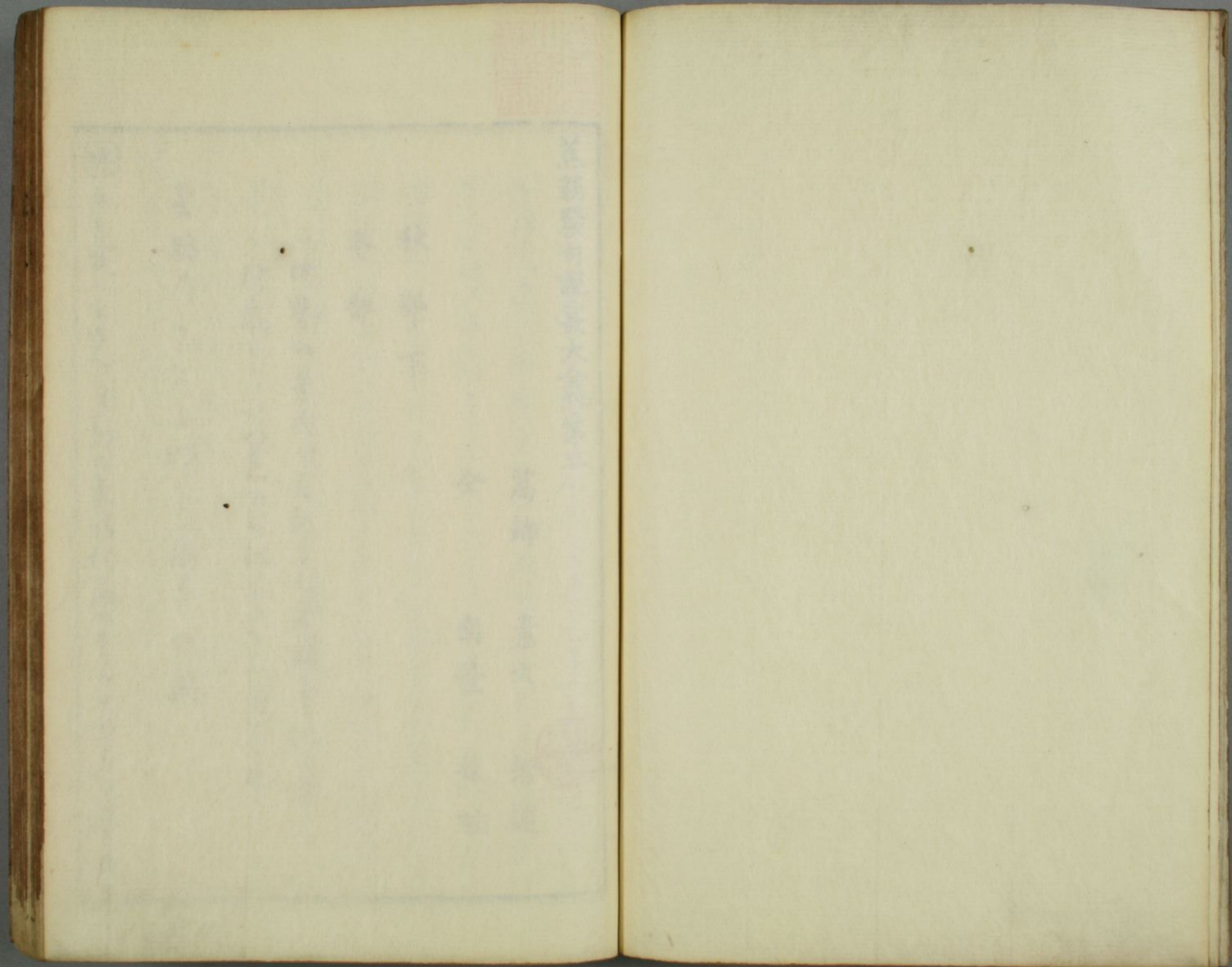




5

Y







蕉翁發句說叢大全卷第五

葛飾

素丸

著述



全

南臺

檢校

秋部下

冬部

伊勢の守武がまひらん美朝子以て依

秋風とわいつきの雨似しうきん我を又

美朝乃ろろよ似しうあきの風

林

云々武々云々ん美朝の氣情秋風のまゝるこたうとんと依

なく公残すて一句のまたまうし一句は似るうらも秋風のせん
とさる一可考 **解** 云只所問の内海の秋風よ海とよもしたる句を
えりて一歐陽永叔秋聲賦曰 無益を以て今 **袋** 此句を出さず

説 此句詞書なくして一平林よ一初をを紀一 句解
小記に記す初をたつるも一 句をうりて一 略して一 可考也
初葉のため小せんよ略を略す 句選小初をりて **林** 例の
言糊但一 句小初をりて一 書は後よ小葉たるを記す
こつぬし 句は似るしと云そつて一 秋風のきりぬしと記
し他りの也 ○ 叔翁はち武の理屈をもつて一 今我が句他
らに 秋風よ一 義朝の公よ似るしと云一 一 義朝小初をりて一

を情の理屈ありて 秋をい義朝の公よ似るしと一 俳諧なり也
客小思ふよ 古代の俳諧はこれ 理屈ゆらちと云ふし一 風雅
の道理より一 源は餘誕と云ふ人いす 粗妙なり 木曾を
情の句を 美仲の勇烈よ比して注をたふす 妾邪餘多也 信と一
う 源は余をぬきて 妾の正統小をいへて 感ゆら 翁乃心肯
又一層々也 **解** 飾りよ 廉末のさやりしん

枯枝より鳥乃さやりしん 秋の暮

袋 云是者秋の寂しき 船を謂ん 連枯枝を 暮のゆらと云ふこと
云て 譬喩を 船よりさやりしん 此船を 入ての人 此作小乃ふ下よ

何れは芭蕉の骨法是る乎一 **解**云此句ハ季吟芭蕉素堂 派
新立の茶話口傳の一章也夫木集よ益鎮和尚を為初くらとや
せんくひてより我歟の肢乃おを流しきかこまらぬんよく叶へり口
一とせの花江系の葉枯とくく人間無常の觀想も何と云へ一 **林**
此句を止すハ

説 **袋**よ稽と泥をり。大よ得たりといはんもの也文字あまるハ人稽
めて何と云へ一と古式よつふくはる僻見より稽と泥をりめや可笑
○宗瑞曰稽と泥をりハ鴉とえんたてて誤しふらん可也。廉末
の至也。○稽のゆりハ中ハいふ譬喩也ハ泥をりハはるハく。
右本よ鳥のうぬり居るハと見えハ譬喩ありてハ句の正脈と云

しるすハ所の也 **解**云ハ所の季吟芭蕉素堂新立の茶話口傳しるす
事いぬハ素堂と季吟の對面いぬハ也。黒露よすハ是も
右のごとく答へハ季吟誄諧と業とハいぬハ也。活よ住ハ用ふ
へ召しハ前ハハちハ小俳傳とつてハそハハハ平字と業とハいぬハ也。
誄諧と括り。季吟と翁ハ師弟の事なりハ口傳の茶話もり
登ハ素堂江戸の深川に居て何と見よつらんや。思ふは翁江
戸へハ素堂と隣家たり。但深川ハ坊隣家と素堂の文もりハ也。
相風雅よあか依て此句の相誤等ありて。正風餘一派の新立の誓盟
有。杉風使ハて此誓盟ハ也。知ると世も傳へ遠いて。つらんや。如此ハらんハ。
季吟も亦何ぞ此誓約ふらんや。雖信用者也。一大の虚傳万

犬とわらまぬ ○ 芭蕉の句、ちかいて、いろもなげくは、余情よわめて、首
 年とくたぬとて、へうげ、今も堂上より、此句、定家等の、浦北とて、なほ
 色並ぬ、なほ、秋の夕べとて、まよふ、或人、活の、真偽、は、なほ
 都て、名句と云ふ、解とて、なほ、解せ、まぬ、の、ハ、ツと、つ、の、自ら
 開悟、解得と、あ、か、ら、に、是、と、ま、ん、も、亦、解、ふ、り、す、予、又、一、句、の
 證歌と、思、ひ、出、り、夫、木、抄、山、如、の、祖、の、た、り、あ、の、あ、る、は、な、ほ、ま、ま、
 乃、ま、
 沈乎也、井蛙、井、又、連、俳、集、要、も、
 此、空、り、や、又、以、合、作、ら、ん、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

此道や行人か、小秋のうら

〔袋〕云此句ハ秋の寂しき小ついで流鶯の乃小も携ふ人か、と
 欲する句とん、林云空山不見人、以、予、詩、の、句、也、あ、ら、ん
 行、う、る、解、世、句、と、出、る、候、

〔説〕袋、ま、
 ハ、注、し、け、る、や、儲、さ、き、り、こ、や、い、ん、林、例、の、小、見、の、味、が、こ
 う、此、一、句、ハ、空、山、な、る、少、人、と、見、ぬ、也、志、ら、く、詩、と、解、し、
 そ、こ、な、人、家、と、る、也、○、林、僻、来、人、少、山、長、去、鳥、微、も、ほ、る、と、
 秋、暮、ら、ぬ、と、寂、寥、と、る、と、後、小、と、り、人、か、と、之、在、一、人、も、ひ、と
 の、通、り、ぬ、う、し、ハ、ま、ま、ま、ま、切、く、寂、寞、と、模、寫、し、出、さ、し、た、め、
 人、か、と、一、句、也、と、せ、し、れ、と、也、此、七、文、字、又、切、の、也、と、も、ま、ま、

詩平ふも、さうとあは有とありとこいふも徒言也、何事もな
 かりきたるや、又時の信切と述るこも、句もたすべけれ、又
 俳諧と推する人をきとをげくとも、深くすむべ外も、こま
 く、無事の辨も、つるな、つるな、翁は心肯ふ、わ、ま、あ、ね
 て、い、ん、ふ、い、右、風、の、入、か、が、初、ら、ち、り、怪、屈、難、談、小、の、と、指、び、て、
 其、實、の、風、非、と、た、つ、ひ、ん、な、き、を、一、ま、あ、こ、ま、歌、く、知、つ、い、つ、ん、
 若、し、か、つ、ま、い、く、や、本、曾、此、情、の、句、と、勇、烈、よ、つ、ら、注、者、ら、よ、の
 る、ま、い、と、歌、う、け、り、も、つ、る、を、一、決、く、了、解、と、き、事、や、

相乃本よ鶯なくあ塚の内

袋 云此句徳有て世小庸らつと寂寥多と相憐しくとらす
 人への挨拶也相の本ハ風風の柳へきふん然ともも塚の内小
 鶯鳴ことと云い、ま、つ、り、是、つ、ら、い、ハ、此、色、の、秋、風、乃、あ、つ、と、鶯
 鳴し、原、此、里、と、本、あ、り、て、今、ハ、塚、の、内、め、も、啼、こ、と、の、化、や

林解 此句と出り

説袋 一向の邪註、笑而断摠、と云是也、引あも、つ、ら、あ、
 と、つ、ら、也、予、が、説、を、及、び、ん、古、説、と、奉、て、澄、と、す、ん、ん、と、

○古今抄中、一、小、ま、い、の、證、句、小、此、句、と、奉、て、曰、鶯、の、一、章、ハ、
 田、莊、の、酒、家、と、云、頭、り、り、て、こ、句、と、す、り、其、家、の、窟、半、ハ、田、思、ハ、
 や、ら、ら、と、い、ふ、と、と、み、文、字、小、句、と、切、て、相、の、あ、や、と、云、へ、く、い、と、こ

つゝに相の本は發句なりん。是ハ相少と云ふは、
家と稱する者向あつて、
きやと云ふは、況や翁鳴なりと云ふは、
今やふの字は、働と云ふは、
相のあつてゐると思へば、
人乃張りけり、
つれづれ此本ハ振の本は、
ハ翁と稱して相を句作の用といふは、
を官家の袴皮の姿ありん、
てやせり日て家く此相を、
併めて、句意ハ、
を田の神は、
樋口ハ二節が、
じごんや好境の、

併めて、句意ハ、
を田の神は、
樋口ハ二節が、
じごんや好境の、
袋 云是真盛う鎧甲と云ふは、
カハ壯年と云ふは、
てらぬじごんや、
翁う物と形容、
護身も靈流の、

まされ。檀林の餘風を改りんとあはれむ。今ふせくおわす。あか
ひざんやあも。却てりりなきものと言ふ可也

菊の後大根此かうばらふか

解 云不見花中偏愛菊此花開後更無花と以ふ句はあへ

てうらぐれの金唐おりのありと一 **袋林** 此句と出ず

說 此詩の心よ叶つと解しては翁の一風建門の心骨小の
らぬ小や。此詩を仮して一語しる句也。ところが俳諧の意地

也。○拾玉集第一とせめてうらふとのとくきふ菊より

後此をーなりれとと意法和尚の詠あり。詩を引かぬ及

。踏てけるの詞後此二字のうらひ ○拾芥抄よ曰世傳嵯峨

隱君子元稹詩不是花中偏愛菊此花開後更無花と云

と愛吟を一日忽元稹が形とえる示て曰花開後誤也花

開盡也と云 ○宗瑞曰け句の更乃字ハ更無花の更とれ

たよりと尤然り ○句意ハ此菊の後を電とくきこのハ唯

大根のも也。俗人の真物とるべき。隱者先衰の身よりハ菊を

隠して静なる。大根ハ陽のて補ひなきハと。待たず人て

此より。其本言ハつきく原の古おおなりやうらこのも。更

と云字又といふ。更とて。映而かーとらふたのこ。葱を

あきと。そはきと葉くく。隠んハ大根なる。一と解と

是字の字のなさを化すつて、翁の句法移して、
感とべき也。○或人曰、此句右の句意あり、
柔なることありて、大根の現也と。予答、
此の衰へ、うらみと、うらみと、うらみと、
の、人ま生の活も、や、や、や、
の風非ふらつて、
座右銘

座右銘

人の短とつて、
己が長とつて、

そのいへば、唇をひいて、
乃風

袋 云は、座右の語の句ありて、
林解 此句と出づ

説 袋 一句の心と形容と、
崔子王が句と

和して、句ふらつて、
とあり、人あり可笑し、
き一車あり、
る候。○後漢書曰、崔瑗字、子王、
早孤、鋭志、好學、盡能

傳其父業作座右銘曰。無道人之短。無說己之長。施人慎。忽念受施。慎無忘世。譽不足慕。唯仁為紀綱。隱心而後動。謫議庸何傷。無使名過實。守愚聖所藏。在涅貴不緇。暖々内含光。柔弱生之徒。老氏誠剛強。行々鄙夫志悠悠。故難量。慎言節飲食。知足勝不祥。行々苟有恒。久久自芬芳。○唇亡齒亡。故事也。○左傳僖公五年。晉侯再假道虞。以伐虢。宮之奇諫曰。虢者虞之表也。虢亡則虞必從之。晉不可啓。冠不可翫。一之謂甚。共再之。

乎。諺謂輔車相依。唇亡齒寒。其虞虢之謂乎。○戰國策。小國唇亡。大國齒寒。○世の俗語。多く人の口を以て唇。人の心を入るを齒と云ふ。思ひ合はれて。此句を解す。

増補

名存の地。と云ふ。棉もさげ

○花雀。芭蕉句。選み。名月や。花と。ほつりと。おと。ぬ。

誤也いづきの集りもむしと見えたりき ○ 東西夜話曰
先師一とせ先師と死の誤とすして名月の如くとみえて掃
留ともいふかひなきは其花の如く底てい本錦の如く
己う作意とくいゆあり連字と古詩古歌と用るはいう
の揺めやゆらんともいふる名月やと切も亦傳寫の誤也

かゝる火よかゞや流の下むきひ

説 東西夜話曰先師いふ高瀬の濱に渾火と云題と
して此吟は今宵桃妖亭よけ句と評して曰無火不
語うは奥をあらはさるるひきふと云一字くうとていり小

海光の麻の糸ふ又りゆは一句の魂と云ふはかかげりあり
よ船も纒と同一心ありとねり人まはり小俳諧と云い

所りきしと盤よるはすむらぬ

説 此句檀林の比乃吟ふして最初ハなごき流地方して云冠
洞かしがたふとて流とて流にけりしとてや荒蕪のやゆ云
んくさる ○ 五雜俎曰凄風苦雨之夜擁寒燈讀書時
聞紙窗外芭蕉漸瀝作聲亦有致此處理會得過矣無
不堪情景とかがはるるもす及び及んまぐ吟すれを
んも初る屋しす私漢古今人情の感とる所一毫も私か

足多も仮の好車者不又をた。くやきり顔よ。云如。是の寄也
る。是も叶つるや。まむしはまむし。まむしはまむし。まむしの冠詞を
まむし。此語乃血脉ともん。ゆるふやと思ひまむし。○三考
芭蕉此をく。序廟卒終ても。往句末が。く。の。ハ。あひの
熱心三四章もわら。是序詞とわえて句も。一。序句の法
とも云へ。

朝をくると誰がねく海のゆくは

説 句選にけふよま物をも記して。秋の秋よ入る。何とも
をゆるく。一。秋の秋乃句と。つるまを。わら。さりきん。たよ。濡れ

つ。又あきよさ。く。河の。と。く。ま。え。ざ。く。く。め。や。自。己。の
非推と。けく。物。をも。ま。し。て。さ。と。不。地。也。物。をも。く。つ。ひ。て。さ。
句。も。物。も。遠。つ。く。信。て。此。句。不。解。翁。の。心。骨。も。南。の。ぬ。也。予
此。句。教。年。め。り。て。解。し。ゆ。稻。中。店。黒。湯。の。色。也。先。年。さ。く。を
ゆ。り。し。よ。是。も。ほ。く。あ。て。か。各。詳。な。る。ま。と。す。く。り。と。て。大。う
物。も。く。解。せ。り。と。物。も。き。く。り。き。説。ハ。難。の。部。も。あ。せ。し
ゆ。り。ぬ。れ。ど。ま。く。不。暇。也。

醒し小なまきろく人の腕乃腸

説 笑日記曰。小なまき。の。く。く。ハ。残。暑。な。く。く。見。と。一。神。の。振

意と注し、此中、チリバ、翁も、かゝり、ハヤ、クサ、ケ、也、云、云。
○小あぎ、水蔥より大小の果種あり。今世俗のミツ多葵アホヒとて、田

の中、或ち用ゐる堀の中、田間の溝、又ハ沢池中、に生るゝ多葵也。夏、
五六月、浮葉の花まで、葉ハ表のてく、裏のてく、つゝふとく、と、
倭名抄、水蔥、穀、水菜、可食。和名 奈木又延喜式、万葉集、小あぎ、
えつら、大和本草、小あぎ、千枚、つゝ、かせ、との説ハ誤るゝの也。

○小あぎ、つれも、音、此、丘、尾、の、風、也、也、予、壯、年、う、を、奥、釣、致、
好、今、う、よ、四、十、年、東、西、の、暮、西、八、折、子、あ、く、歩、り、き、う、ふ、ふ、ら、地、
の、七、八、月、は、ま、う、で、吸、し、と、る、る、と、の、乃、の、う、さ、よ、村、の、き、を、ど、い、物、は、
説、の、端、く、さ、う、い、て、つ、つ、は、知、る、は、ナニガキ腥、臊、う、ら、し、滋、の、殘、暑、乃

時、候、少、し、も、た、が、り、也、○白氏文集、第三、新樂府、縛戎人詩曰、
朝食飢渴費盃盤、夜臥腥臊汚床席、
臥臥腥臊汚床席、
小あぎのやぶ、い、ま、う、つ、こ、よ、あ、り、阿、仏、尼、い、さ、う、の、花、も、と、
引、ま、る、う、女、を、う、り、初、子、の、あ、ま、に、と、

ひやくと、聲、と、め、ま、え、て、アノ、情、ハ

○説、笈、日、記、曰、け、句、い、ふ、ゆ、ん、と、ヤ、カ、し、只、殘、暑、と、こ、と、水、
こ、ハ、あ、り、ず、牧屋の、あ、ハ、あ、り、ず、あ、ハ、あ、り、ず、あ、ハ、あ、り、ず、あ、ハ、あ、り、ず、あ、ハ、あ、り、ず、
と、思、ひ、み、る、人、を、し、ん、と、中、外、ハ、此、謎、を、支、考、よ、こ、う、い、は、す、と、ん、笑、
ひ、の、と、果、め、と、す、○芭蕉行状記曰、元祿七年七月十日、又

伊賀の方(心)しるるもく多しとけりしも粟津の屋よふ赤
きけくやきくもみよ残暑のふとくして此句のり此年六月
翁齡五十一ありて誰波よ終ふ云

右秋部下

十有三章

冬部

口切子埜の庭どなりいしき

解 之深川支梁亭の吟也泉州埜に利休居士指圖の露地なり句
意是等ふより此露地ハ蒼海沸くと見えしを悉く植隠し
てふふむつふめかしてんせり

林袋 此句と出さ

説 句選よ。支梁亭とのわり。深川と云ふ。 **解** さもわきふ
けりともども利休指圖の露地のななりかきくもみよ赤
きけくやきくもみよ残暑のふとくして此句のり此年六月
翁齡五十一ありて誰波よ終ふ云

から海くくらす ちんたるきわくさかしの一帯ハをれおさ
 へも鳴かろくま^{は外十五六} 是此を^{第の河あり} 神くま^りとりてくまを
 権輿^{ハビメ}とくま^り也。其後那波の西鶴が辞かつ一の素隠士
 の辞あり其角ハ様くま^りて辞する事連続して
 芝の傍りの神くま^りありよけを^り然と^り○句意ハ^は世よ
 りてくま^りや^り淋^しか^らく^る事も^も長^く嘯^の辞^より^て
 やりて^たん^ん何^をも^も夜^毎少^は此^墓を^訪ひ^ぬが^いな
 し^いさ^めく^ま也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 あり^て少^はり^てく^ま也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 教^の後^にた^らる^も也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 古^人風^強

十七

の古墳ハ何^きと^ん也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 り^の也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 予^さり^てく^まの^偶作^小長^嘯の^文素^く人^所故^とり^て
 予^もか^らな^らず^と知^らず^と也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 愛^善じ^きを^しぞ^りき^る也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま
 が^句と^も也^ゆぐ^すハ^{なる}まい^ぞと^ん只^空然^とく^ま

對 門 人 僧

ころれやを乃^乃 穉^子 乃^乃 穉^子 乃^乃 穉^子
 盒子イ
 合子イ

解 云此吟句選小古格子と^おき^り油日記小云行脚の五忌一具

那修之殘一重きると路通法師七季の住御南の旌卓一贈るを
るくし河をりり **林** 云齊蓮法師あけやよの涼をのわれきりて
むの麻をけけかの空連華初閑樂の心もやけきのういれつく
少はあゝぬと何となくいりりて風情なれも只よせて一句一首の
格とありよへや媒はうけて曙の氣も何となく

説 此解よ不審の事三ヶ條有り。其一小古格子古盒子と
格の内 **解** 小古格子ハ誤也といへ。知れた。古き集も古格子と
之物と句選亦同ト。史邦が笈の小文庫も古合子といりり。此
香合子と **解** よのこ湯の中よ記さし知れり。神日記に
名遠へ **解** よのこ湯の中よ記さし知れり。神日記に
史登がえへ云りて。古嵐雪の書小りり。先年我も

十八

中をりし。又けふふさくもいつきの古小切あり。出た
し。のち。又菊の古書の上通よりいもんえと。何を
證として。盒子よ極りや。又路通七季の後御南も送りと
ハ。弱と別きて。七季あや。年号も丹日もいづも此
と云りも。又藤のおとあや。湖南句。は
かれ。たや。たれぬ。子。好。事。の。人。盒
子。附。會。せん。あ。う。ら。あ。と。是。也。伝。用。が。
○ 才二対門人僧と希云らるる。路通七季の酒を
る。さ。中。の。二。き。り。て。心。も。相。違。を。也。又。對。門。人。僧。の。顔。を。
は。向。ひ。を。居。る。事。也。志。う。ハ。路。通。も。よ。今。對。して

うつらうとど也。○又此句序しるる亦ハ媒拂乃時ありし御
ご格子のよく極あり。昔も小。媒をさる古橋とてハ。いづも
う事とせん。あとも定めづらん。志の古くすけらんハ。古道
具屋も。為ふ何て。事とハ定めづし。あとも事ハ深あるん
ゆ。古格子いよ。あとも。世の媒とて。けらん。媒拂の介なる
屋。○路通が事。頭陀物捨よ涼袋。委也。河ぬ。あとも。あとも。
高懸腕の。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。
流を流て。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。
大屋氏何某の。方小。寄居して。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。
病死も。昔も。三四巻之。寫し。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。あとも。

二拾

為の事も路通よりはしし也。

世の中事 ヤ 宗後の時雨 水

袋 云世小あハ世を經るしん而あつ小強とどうあつ世を強り
河文宗祇の心小しを時雨ハ面白きれ也 林 云此句ハ宗祇法師の句
小世よあハさしに時雨の中よりハ流益銘益銘 愚考するよ
夏日記ハ世の中よりハ流益銘 新古今二條院讚岐世あつハ
くくさしめを格のあれやともすらんしんあつハ世はくく宗祇の
句とあつハ 世とあつハ 世とあつハ 世とあつハ 世とあつハ
也 下畧 此宗祇の句よつけてもさるの句行く也遠ハあつ 予 讚岐

しと流すとしてかとりとらん程の考也 **白選** 云々 世ふもと
り杉風所持の短冊よの中とらり

説袋 一通り了了 **林** 漢波のおうり宗祇乃白物と云

又け句小指したるもすははえぬ但し又文字れ事
後日記ハ支考が撰めて誤る處さふもゆす雅言のぬり

をを懐くへい宗祇の延りけき。とて世の中へ
く多のしを支考がすにたおせしと見えたり又世の中へ

あふ。ぢらうも回へるの縁修よふとハ宗祇の連字也
世の中へあふ俳諧の利口也連俳のワうれりともあふ

漢波のそのこと津とせむハ俳諧おきたるへくとりふるさう

坊く杉風所持の短冊。翁の自筆とし世の中とらるるハなふ
の倍ありや

任けぬ流乃く河やをるへい

袋 云是至巨燧りわとて流乃の流り或人任けぬと炭
焼くぬとハ語也いささくと居るまぬとをるへいのワうり
ふ句也 **林解** 此句と出さる

説 流中の吟多しむハ此注あまう。去るへいのすたる
其角が枯尾兼つるハ是ハ葛鎮和尚の歌なり流の世より流
病してまぬらうゆめれあうふも愛とるらうれと。うまを流し

一、小のしをけりしをけりし。○ 若くはまぬと。並ぐりしの句よ
まんずりハ。尻をりぬ旅麻の身了とハ。並ぐりしのさあしつと
と。一所不住の執想乃句とせん。増く金きや。又並ぐりしの
まかしくりやとくわど。旅の尻尾つらぬよ。似たりとも聞か
拵中の詞去も入るぬ。炬燵の句とやいん

茶買り雪のくろや投中

袋 云深川八笈と云茶買よりと雪と云うけて茶と投中ハ
ゆりし。祈也。林解 此句を出るは

説 行をゆきしと云うけんとハ。古風の解めて入らぐ也。蕉門

わさのうらとほまづ。まかづ。一句あつ。のり自和し詞のつぎ
録ありてまひうけたりと云。是ハ雪此日の興よ。深川のくを
茶店よ。八人集合と云。粥よと云。いざ茶買あり。紙のゆき
さげて出たりと云。つと。茶と云。中あかづと云。ぬりぬ
即興の姿おかし也。投中の中あ。うり。うら。名人の句
染。か。色。あ。を。と。雲。ぶ。ん。き。事。し。

雲乃日夕危此皮の蟹つくれ

袋 云山中の子在の拙んでと云。兔の裘と云。あひ。下り。あ。か。危。遠
可秀又或人曰雪佛雪達摩しと云。序よ。越。後。危。の。白。き。蟹

つらつらと子たて下わくは句や作らんを **林解** 此句出らんがよ
あまきと解さぬやと見え也。

○ **説** 去来抄曰、魯町曰、け句如何、去来曰、前書よ子たての
てのりも子たての業と思ふ人、心か、理合とて、わくす、
と踏破て、か、け、け、け、先師此句と、
先師曰、是を、け、け、け、け、け、
結文、
神代の巻よ、
け、け、け、け、け、
又、
愚考、古事記上卷、大田主神、
稻羽之素菟也、有文、
九三、
九三、

ケイ、
け、け、け、
や、
の、
選、
と、
馬、

○ **註** 云、
よ、

ひうの事かこぢひ出れ眺らん深一 [林] 此句を出さず

〔説〕 袋 注小見の雪とえて白しといふがぬし不可用 溜せつと

の集りもいすさるん出ず句選りもかゝるおのつと知るが
人の後り泣くもいせんぬ 溜せつとて 詠人さるるさるる
さるるてぬくもい 翁何ぞ かくもつとせんや 是百菴がいつて
て翁よ罪と課とといふか (○) 此句さるの詞よんと身屋し又
かゝひるの詞よ海さつわつ 咏の字ぬハ 詠くころ 古来さるる

任原集伊勢

春まてつのがさるぬさるぬ人のぬれぬれもさるる

深住の家集

さるるハさるるハさるるハさるるハさるるハさるるハさるる

任原集

つとつと我身世もさるるさるるのさるるのさるるのさるる

此奇なりハ上よ春由とつらハ下のおろハいよく 詠きさるる
あささるる也 ぬよ海びさるるハ雨ニハつらハ又順徳院建保二
年歌合 深山雨はさるるのさるるも今やさるるさるるみやまれば乃
ひつさるるのさる 是らハみか 古よさるるして 詠くぬのさる 是るぬ
ふし 後世思ひやかとさるる 元後さるるさるる 詞とつと合さるる
がめやさるる 詞とつと合さるる 詠を詠者のさるる
んさるる 詠とつと合さるる 詠嘆の事ハさるるさるる 詠りぬれを
いうわさるるハ西土の書ハ 飛耳長目ハ 詞あさつとて 長
目ハさるるさるるハ 此詞つとつと合さるる 新古今集
のさるるさるるハ 遠を眺望ハ 是詠さるるハ 叶ハぬや

也なきに染をりてなりは形容也 **解** 之師走の月此すは師走月也
子路のつて之を為し又枕をみよと 世をみよは多の略す

説 兩書ともは師走乃月といふもや清女といふもは
所は清女ももふべし勇はきびとて凄しき物ありとあり

清女のすまはしきといふは冷の字に訓ありて勇烈乃さま

小はつとて烈の字に意ありとや清女もさハハはしき

坊て翁此句小云へくす公時契會とも作らば是全くは意

小はつぬとの丸 ○ 篁之記曰 此書偽書也と人ありいふと説とんは南郭の獲菴遺稿おも引用ありは後にも用也

十列冷物・師走月夜・同肩・同蓼水・老女假粧・女ノ酔タル

・法師醉舞・無酒神樂・胡瓜老タル・勅使破打囚競馬

・昆侖ノ仙舞画云云是小依てえれは清女より前小此律
ありて清女又つらつら南郭ハ師走の月と云ふもさハハ
あるより有はハ本成下とて建移小此一重なり ○ 考ふ
此句ハ子路が義を守れつとの潔白なる小よきて月小射して
真とてありは月白きと云ハ潔白の公あり冷しきつとあり
とて改小揚升菴白の字に異訓を奉ふと日光の白きを偏と云
月光の白きと皎と云あり此月白きハ皎也皎月とも云也
子路衛よ乱ありとすてつとてつとて澹よて冠の端を切
まよよ君子ハ死もれども冠をとふこととて其端を切ら居る
うらに終り突殺されしハハ義者の心師走乃月此言

後りくふふとくきと也。海むしつるはふのりくき
義とちること。蕃椒のてくせむとやこれ。この語も
の比喩。風と云ひ合きての吟めむも知れず。ぬれは子路
ハ喩乃使して。衣を食なりとも。公潔白ともり。買ぬ
もさ。俗淺ともく。義ともはる。蕃椒のてく。心かけを
為事子足きんかや。世も若し師走とも。我はと
家よハ月面白き寐さめと。一き下おつとやめて。風喩乃
句如る。りす。子路ふうん事なりや。五代小蘇の胸
中ハ推量も在。うげ。かくワの清貧の生涯も。うけてんふさ
新句意掌上乃玉と。んくめく。んんん。感歎風喩。とく

廿七冬ア西一

後のん人思ふべし。○再考もらん。都て白や。重とちうと
つりや。やと。うぬ。句位むし。け子路も。句は。かさ。か
屋。店の寐えうて。ハ。句收り。む。子路と。重と。つけ。も
なりし。蘇も。此句。小は。少。かさ。と。りて。ん。さ。ま。し。也。と。や
る。子路。の。る。迷。る。る。

増補

とをかくもなうぞや。雪乃枯尾并

説 此句三都よ。出。是。由。来。何。句。多。り。此。句。の。出。所。也。

其角が枯尾む
 の序小玄圓覺寺大顯和尚とやが易に云くれくともよ
 てうかひゆふ或時翁の年卦れやとえんとて年月日時
 古曆よ合さて筮考せしむるス華ス中ス卦ふあはる是に
 乃すまきの風小吹き而よ志月きまきこの數くまけく成ぬれ
 とも命はさあぐらうして世ふり成さす而よまきとて
 ありまらうとていへるも幽に潜るんことすいもあはる
 可つらひてやいひす家こころぬとてやとて云はるは事思ひ
 合せての吟なりとて句の由る不據りり感情深長也

九八 冬 十一

鞍壺 小坊之翁 大根引

去来抄曰蘭國云此句いりあり而面白き去来曰吾子今解
 張くん只翁してちとて壺へて死と圖とてた奇山幽谷靈
 社古寺禁闕等よあはる翁あはるん能く少ハ古茶多ハ如此
 類ハ翁の所ハき少ハ何ハす不疎分れとてやとて又翁と句して
 形好ましかぬ物なりんこれらありとて翁あはるん
 を希を翁あはるとを画とあはるもよあはる句と句して
 ようとてひさむと大根引の傍り茶をじ馬の首うらけとて
 鞍壺よ小坊とらうらうと翁とて翁とて古かんとて

○ 止

松（しん）や（あ）せ（く）は（一）— 葉國（の）見何某却（て）美（み）か（う）る（る）感（かん）。
 ず（か）も（ハ）俳諧（と）あ（る）す（と）し（と）も（ハ）画（と）能（さ）る（少）也（ハ）師（尚）景（の）
 子也（と）○一（と）せ（或）人（の）り（て）い（て）給（レ）配（偶）さ（る）留（小）讚（の）ど
 あ（ら）し（と）見（侍）い（ふ）小（政）後（家）と（も）親（兄）の（希）小（も）出（す）り（と）
 志（と）表（具）貞（潔）画（も）昔（人）さ（ら）い（や）あ（ら）ま（し）る（心）の（の）
 う（と）あ（ら）し（思）い（て）聖（日）持（た）れ（し）つ（つ）す（浅）あ（ら）し（き）を（依）
 なる（と）や（鶴）の（集）と（是）と（や）世（上）の（画）讚（也）素（丸）の（讚）の（法）
 と（知）ら（ず）持（と）つ（る）忘（者）も（あ）ら（ず）や（全）く（深）ま（ら）り（す）
 ひ（か）せ（り）の（未）熟（なる）是（は）讚（の）法（に）り（て）知（ら）ず（俳）諧（の）
 ち（ら）あ（ら）し（や）留（持）つ（ら）る（た）あ（ら）し（ま）り（と）持（と）も（門）外（の）

九九 冬 十一

い（さ）め（て）ま（い）や（う）も（も）持（と）ら（や）を（後）ハ（同）り（と）あ（ら）し（ぬ）

五月
月代（や） 毎日（う）り（し）つ（つ） 解（乃）音（音）

○ 芭蕉翁行状記云今ハ夏先師
 去（年）の（最）美（小）月（一）と（や）二十日（小）あ（ら）し（う）此（時）の（音）あ（ら）し（退）り（た）
 ぬ（き）後（成）— 兼（好）法（師）才（は）う（ぬ）きあの（月）は（八）日（の）あ（ら）し（小）
 あ（ら）し（小）人（よ）あ（ら）し（ぬ）身（の）の（心）や（こ）う（う）小（を）さ（ら）し（る）此（月）も（も）
 兼（好）も（終）く（伊）賀（の）心（よ）死（と）り（ゆ）ら（し）つ（つ）人（や）再（度）世（小）
 せ（り）て（す）傍（の）風（雅）と（起）— 人（と）い（う）あ（ら）し（く）又（い）あ（ら）し（う）辞（世）
 と（あ）ら（す）つ（ハ）誰（も）く（り）と（し）あ（ら）し（と）氣（少）と（あ）ら（し）つ（つ）る（心）

子也則辭世也何事と此言よゆらんやとて臨終のさう句も形一兼
 好法師もかゝるごとくけりしとくやと云ふ言ひ合はれハ華言の句は
 成ふしてさうとけりしと云ふ○兼好一代乃名前のうへに龍もこ
 のこそうに近き有明と云ふこのりかづれとくや人ふちきぬ子
 りやぶの論(のこもゆらん)を臨終のらうやわが修悟とも云ふべ
 こそや此句を南唐よ裁入するのこなり又解掛と云ハ出せよ
 と云ふこと毎日よ近しと云河の裁入連続と云一ハゆふ年の終乃
 季と云ふべし○宗瑞云按どうん餅よ季とりてせしむつこゆ
 もゆらん有毎よ毎日ハあきど年の終れ物悲しハ明らうく
 餅の考ゆえらう世にハとぎきと同居すすやと云ふはゆらん

貞徳翁讚

幼名やまゝぬおきおれ丸頭巾

説百菴万々葉小此句と解しと云まゝぬ翁と云ふ事ハ拾遺
 旋頭歌小ほもかえと云ふるけ小句いふてえらゆことと云
 ぬ翁よゆらんと云ふれ其存後玉庵宗祇法師画像自歌よらん
 一と云ハ形彩ふと云ふ世れことと云ぬ翁と云ふやまゝぬと云
 漸り我親の家あぬと云ふ此詞と裁入く貞徳の深小せと云
 一也又云此句幼名や不知翁と云ふ續きハゆらん(ゆらん)と云
 貞徳の幼名勝熊後小勝熊のちと云て道遊軒と自林と云

まづ芭蕉翁も吾々祖先の幼名を不知ハ疎略也といふ○考ふ
 此論甚不審也。茅一小次嶺經^{卷四}山城国乃名所と云集りて
 うし北村季吟の述作也といふ。吟花廊道遙軒貞徳の地と妙法院
 御門主より賜つて建てしと云貞徳名のハ勝徳といひ一判髪
 して勝越軒と号し用ぬとて。妙壽院道越軒と改めしと云
 了。延陀丸長頭丸外ともつらき。然るに季吟ハ勝越といふ貞徳乃
 丹子也。勝越のまをかうして。道越軒といひしと云ふ記。長子道遙
 軒と改めしと云ふ。莊子の道遙遊といふと云ふ。吾れ毎り
 かんおハ。季吟との事記す。きりん。茅一小。芭蕉の祖先ハ伊賀
 茅小。桃地黨なり。桃ハ桃井也。太平記の比舞乃家よりと云。貞徳

ハ松永倅正が末裔なりて。芭蕉の祖先より云。其説毫まふ。又俳
 諧道系乃よりし云。一也。然るハ俳祖とも道祖とも記す。きりん
 祖先の字ハ氏族よりして。俳諧の血脉派流のまをた用お敬き文字
 あり鳥碎も亦小。惑説と申して云。もて成ハ保平彦宗清が末
 流也。依て宗房とて初ま名宗一と。甚る録例と云。如此系圖と云
 ん中ハ。宗盛の宗ハ宗近と宗元。公時の時ハ時政の時。小兒の啼と
 止む。咒乃。ぬ。板。お。お。世人迷ふの候。お。も信用すべし。云。云。
 俳諧ハ先祖と系圖も入り。上。古ハ墨量次第ありし。人。く。派。と。建。て。
 師の系図なりても。名人名哲を悉く。今。小。傳。了。何。と。風。雅。平。呂
 よう。ん。や。翁。ハ。隱。遁。仁。也。系。図。乃。一。か。の。や。云。云。行。き。と。云。云。

○ 深川の素隠士じ〜黒露子詰て曰桃青の右
ハよの比京都の儒醫小桐山正哲と云博識あり〜
名よつてた〜と。翁最初小形ま〜は。詩經桃夭乃篇より桃
青とハ名づけ〜とや。見ハ桃井の音と〜して。中姓とワ〜ん〜ん
中。押〜ん〜ん〜ん也。少〜ん〜ん。氏族の松尾と名宗〜とや。け正哲そ
俳名も智機と云て。長倚の大通辞。榮木仁左衛門が舍弟也と。先年相
中菴子よお清〜ん〜ん。爰の記〜して。偽説と正すりのし支考十論
小梅子未熟のつ〜とや。記〜と〜事あり。支よをハ〜地〜。満よ〜も〜
る。此句切名や。ト〜ふやハ敬美のやよ
て切や也。百菴ハ〜のや。口合乃や。あ〜の教〜と〜つ。あや。〜

切名ハ〜切〜る〜な〜ん。〜り。〜敬美〜也。貞徳如き人の切名
印〜川〜の。菴意〜も〜。句意ハ切名ハ勝能丸とも〜人
も〜。右き人〜ん〜。を〜ん〜。依〜て〜の。箱〜。の。羽と裁入〜
〜と。佛と動〜さ〜。〜切名ハ〜と〜。猛〜と〜。師〜。き〜。海〜
長江丸と世に稱〜。此乃の世活やきの。やさ通〜と〜。あ〜
を〜ふ〜と〜。今此等と〜。又小對せ〜。九江中の
信〜。古〜。余情〜。句也。切名ハ〜とい〜
不切也。切名や〜。敬美〜。その。集〜と〜。ゆ〜と〜。句〜
〜。虚實と〜。〜。せよ〜。

我くさのとぬらつゆはらひてふあまもくもそ
きんくろりゆはらひてふあまもくもそ
あまもくもそ
あまもくもそ

初ゆきや 幸なまらまうらわさ

初ゆきや 幸なまらまうらわさ

此句諸書に、梅うらやまをさしたるむかひと池をすして
世も出づりて人う訪まらむ句やうもあまもくもそ
初風が家珍は翁自筆の一軸ありてこれを記す。是は貞享丁卯秋

乃美墨跡也。初春うらやまの句、二十四章有。可信也。句此
初とありて、句意あはれゆらうん。是もあまもくもそ。柴の戸はゆらうも
と希云をたし。ふ記をききまらうもそ。世注者乃麻未うらう句
とありやうもそ。

のらふてあまもくもそ
あまもくもそ

あまもくもそ

此句の詞を句選よむてうらやまもくもそ
あまもくもそ

あどたどして句意乃ワリワリととくくららみみををららよよ併併せせぬぬ。

ややららににととくくららみみををららよよ

ききががひひここづづああざざににももららねねふふららののせせ。

説 句選より句とて出でて句とて年の暮と記し冬の部よ
おせしむとぬし希ふは杉風家什の一抽也此句もどりふりて
涼よいりふらうらむせの松うらうらと何うあはれに
句も嵐旦とそん由春の部よ記すべき哉事多くてりしはとて
今ついでありしころり出てもこの也句意ハ正月餅を解るれ
よや餅負ふと遊ふは縁海とさく牛と遊ふはふつと縁と

ち風の沛也ち風の沛也ををららいいああおおてていいららよよととくくららみみををららよよ併併せせぬぬ。
とらりふとらりふとくとくららみみををららよよ併併せせぬぬ。
末なるりの也又鞍末なるりの也ととくくららみみををららよよ併併せせぬぬ。
ややららににととくくららみみををららよよ併併せせぬぬ。

智月とる尾の柵とるく

少將のあまねをのりやあが濃雪

あまねをのりやあが濃雪 ち月

是亦正筆ふらりま縁ありとるハ不記説猿蓑炭俵集おも大
津尼智月とらりころりこ州が母也○少將尼之率 井蛙抄

行宣法印の信實朝臣女三人あり少將内侍 井内侍 此方より少将也

藤原門院の少将ありて秀造にわのう流よつてきまののさきん

ら人もあつてもやうしんとて致と感して系極美の老好よ言今

とてて何となく。契書に國母山院少将及依為此道之堪能不觀老

眼之不堪書寫之云云少将内侍の先ようせて友人の少将井内侍 藤原

門院乃少将老好の出家して法性寺の旧跡に住りて平親清

の女吾妻ありのかりてさるる名譽れんをいへんせんして法性寺乃

宿所へ移りまうりたり持佛堂に入て障子よりあやしのものを保き候

うふらつてせよよはつさし此乃れ法性寺も流よ面をくると老の好も

つらまつてせよよはつさし此乃れ法性寺も流よ面をくると老の好も

きさんいりありぬをといをれけりやさしく優ふるを傳れいなるはと
あつてつゆあかりてみよえ中なりぬ云云此流よ又井内侍のりも記を
見。女兄貴三人あがりてれあよとありて藤原門院の少将ことん少将
みよ。流よ出家せし流よ。少将の尼とつよ。又おのづねの少将といつてもけ
のり也。○白意也。智月も此雙常れ尼もあつてさし。り末名も老
はつともあつてさし。少将の尼もあつてさし。

何れもあまきのよはとてあつてけ

○ 白選よハ。きれよもとてと死す。○白梅園路水の俳諧良材よ

曰翁一とせきのよはとてつとけと云白也すあけみま字と重しん

て海の信徳う東武小第とむのくを待く何ともふの七宮と
 られ信キツシラ屈乃神と何くくあ能やうの海舟のりくと幸立あつは
 しめの日風とうつ一候とてづり何まこの早霜と布袋乃禪小
 なくく都鄙の吟詠と宗祇の履子あーやとわして一夜ハオ小
 一皮ハるりり川の流巻強とて志うもりの水あけさうせし
 むのうさーをばう日東乃杜子美あり今の世北西行あり花晨
 月夕も昔為迅速の成れわう成かつて見て尋牛得牛の大略と
 世又せし水あや白く巻くやもさす色ハ酒よりち年耳すむ
 の表あり見ふんわりの今も揚水するところちなる今も此境所
 りて此神とてう候よさう海を神ハ人よ何れけりてハ愛くせり口

と夢の心得らん事かしくゆりうも月ひむりそゆりう原に思あて
 其人と初ら葉ハ只乃去くくくを柳とくくやむ十菟角小けとらめ
 と心くけん人ハゆりうく取捨と思もよ得失とくくわあー
 とくみ殊小感驚ー侍さハ爰小記ー今四季は終くくく

右冬部終

十有八章

雜部

あさ... せんぎのまろ... ぬど... の

白隠 小竹をいふ文字と出... 記... 秋をよ入也。又雜の部小竹...
 のこと出... 一句と二句ありて、出... 不特也。此句の解せ
 ざる也。 **白解** 小蓼をいふ句ハ松為行脚れりい...
 此乃句... 一名所ノ報の格也。即名句意... **袋** 小麻... 棹
 ... 松島... 句の意ハ麻の棹... 是ハ... 平忽...
 ... 松島... 句の意ハ麻の棹... 是ハ... 平忽...
 ... 松島... 句の意ハ麻の棹... 是ハ... 平忽...

此七

あさ... せんぎのまろ... ぬど... の
 ... 松島... 句の意ハ麻の棹... 是ハ... 平忽...

說 三書とも小此句解... 麻の棹... 盲者の疾... 毒...
 ... 後世小流... 忽卒... 鼻の先眼... 古今抄... 雜... 題...

一の今の俳諧は是を採らば雑の發句はくぬあくの句ありて
 四重乃至都立少曲節と云一今採らるるに多所は兼て兼句
 あり一白アリ其西此名と出ーは風景の情をうつし一志のす言
 事の活法をいへんせんは情ハくぬあすあやのやうに一とせ
 雲の吟行小あさよきささの かハヤ 採らるるの浦山乃翁は
 をそき記けり小をりしゆりーと云袋小報の句と云
 りのふーと記さし亦偏僻也わが連歌もわらわと俳諧も
 とも何ぞなきてあつらんやより又なき事やとせよ翁乃翁
 是めて兼一終りハ却て玉の寶よりて抜群の考也是凡
 才小なりと云沙也 解は松待らん立待ハ此乃吟と云も不

此ハ...

不吟味也依て古今抄を引て澄とすふりの也○馬光日記乃
 内素堂夜話聞書曰あさよきとつ小報諸人名所と思ふ
 らぬはふたなりとす奥羽乃方言ハ和と何と云夜とよき夕と
 ゆきと云ん朝よきハ名ぬし日長朝言且言あさ云つ朝取ハ
 たりとよきとつけるハ鄙の訛と云今滿國ともも夕とよきと云
 小あよきと云皆同と云○澹齋云河の下にさゆいと云
 ことばあふら訛と云ふもゆきと云ふもあさよきと云ふ
 ことばあふらみふ助諺に古き河の都小さくつーが田舎ハ
 却てゆきと云ふ此類ハ多し○考る小此句意を
 日夜朝暮松待へりなきものもあふハ訛と云我を待

人河... 今松崎へあつて...
 て... 念想
 ぬやと... 誰か
 ... 田舎
 ... 訛
 ... 既小清風
 ... 松湯
 ... 乃吟
 ... 訛る

一冊九

... 句意も... 切す
 ... 宗紙乃や...

笈日記云三月四日元禄武江よあ... 上二日ハ阿叟の忌日つ...
 ... 深川の長溪寺よ...
 ... 是ハ阿叟の生所よ...
 ... 此短冊と...
 ... 一生此堂...

説 世小長... 寺の翁乃塚と... 人...

書く。子時明和の。五林録の。

けいせいのこのあひだんろねん

せいのろねんを乃人の

[Faint bleed-through text from the reverse side]

和跋

跋

凡經中子集の類皆注解ありて其注

者の見識れ精粗氣質此編駁ありて好む所

乃其料理可味の辛きなり其臭たありて中道

此鹽梅ありて味その多し響ふ蕉翁の白解

濃諸抄せよ流布を彰もの少くは次夫を併

道此多端ありや上ハ王子公孫の威儀とて

下等馬士船頭乃振合芝居也方振目每街
 の誠治はても擔い事これに賦比興乃云法
 尔配一信談平活流りて風雅頌の云體を扱
 ぬ後の人は是を釋せし尔五所ある方言五音の
 清濁の遠り有る何る一朝一夕に解一一意
 さむや其解より多人を其氣質の稟る事
 奇一も事と云ふは此の直の人を不知と不知

和跋二

かゝりて後世の譲り心乃按排也如えは邪
 慢の人ハ不知と云ふ已る管見は附會一一誤也
 知ても是の辭つくや非尔非を藝ぬ世也
 女子に似き風壯士も何れ醫者に化る出家也
 其操を放さぬ神主もあや天狗も以て
 山伏も有る其柔弱も放蕩も暗昧も高慢も威
 自己乃得るに帆を上げた大洋にも走んとは是

亦對して論をなすこと六漢樵乃云樵夫の
 之語も周人乃死鼠鄭人のあつたはつた風俗
 を河内を是より答むかうこと童初の謎く平
 行塔と解んべ例もほんやうと云ふんもか
 理乃以きらうこと一茲も絢堂の老人性俳を
 嗜む行立坐臥亦是な廢ちと舊翁如心操を
 量り白意乃齟齬するもの後學れ迷ん事

を深き歎き新注解りてん事や歌の内典
 外典より風俗の今物語りてん事や當もつた
 不洩十餘年の功業より史書に説業大全あり
 不説は諸説也業より集略也諸抄を集めて
 全く正當の解をたす誠を能くみせりといふ
 さしとも莫邪を鈍と一鉛刀を利ととも家人
 と多事終に此尤乃解りて難き人存んこと

假令注釋乃粗密をありとも其志乃真を争ひ
 仰き慕はば居るべき予色此人と思ふ夕可菴下
 尔遊如事多幸此老の主一無適乃志一字一淚
 濃績見給尔随ふ間み随く感賞す後學の士
 此書を閲して謹より其志乃深厚を仰ぐ
 衆盲の象を摸するの如く一所止歸るを必
 誤事事やん抄子乃因兩と見越入道と見て他

和跋四

尔笑し居るくも能精神を定めり其蘊奥を
 探り絢翁の志を繼いで怠ゆるりあつらん亦を
 蕉翁乃骨髓を至らん事又難くくと物犯
 りし辭を不顧其趣を述りて大尾を題すと
 云尔

癸巳のとき

かきしう

郷磨誌



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

漢跋一

說叢大全跋堂主人素以
 蓋蕉翁之於德音也其盛
 矣乎片言朝咏嘆則洋溢
 乎天下之耳焉一章夕吟
 呻則鱗炙乎天下之口焉
 然而風調出神髓清味潛

淡_レ薄_ニ澹_一乎_ト其_レ不_レ可_レ究_ム也非_ハ
 善_ク逢_ニ其_一原_ニ者_{トク}未_レ矣_ニ越_ニ頃_一年_ニ
 三_一部_ノ注_一解_レ競_ヒ起_テ而_レ兄_一弟_一鬪_{セシク}
 于_レ牆_ニ其_一說_レ囂_一然_ト載_ニ鬼_一一_一車_ニ
 復_タ妄_リ鑿_一空_ノ導_ニ人_一於_レ迷_一塗_ニ豈_一
 不_レ痛_ヤ乎_ヤ幸_一絢_一堂_一主_一人_一素_一丸_一

漢跋二

君_ニ崛起_一江_一左_ニ有_テ闕_{スル}之_一于_レ夙_一
 于_レ夜_一憂_レ之_ヲ耿_一々_{タリ}焉_一遂_ニ爲_ニ後_一
 昆_一忘_ニ唇_一寒_一秋_一風_一之_一箴_ヲ以_テ成_ス
 此_一稿_ヲ也_一褒_シ之_一貶_シ之_一臨_テ文_ニ不_レ
 諱_マ廢_シ之_一舉_シ之_一當_テ論_ニ不_レ讓_一徵_{スル}
 之_ヲ取_テ之_ヲ左_一右_ニ歷_{アミ}涉_リ諸_一家_一苟_セ

無沿襲之私可謂不朽之
 明辯也是篇始出蕉門之
 藁塞闕之廓如嗚呼時機
 之否泰既別而一洗蕉君
 一字一淚之心骨矣孰不
 雀躍哉又內則慰也翁之

漢跋三一

幽憾而致孝於焄蒿外則
 敬言醒衆人之惑而傳鑒於
 後來矣可感斯卷亦九君
 一言一淚也僕之小黠雖
 厄及茲而忝奉筆授之命
 敢猥以餘墨汚殘紙辭罪

無池爾于時

安永二癸巳春三月

北武州奧驛備後鄉

門人敬林謹跋并書

